大勢が集まった長沼地区の住民集会＝15日、長野市津野の長沼小学校

長沼の未来 声上げよう

堤防強化など行政に要望へ

被災後初の住民集会に400人

台風19号による千曲川の堤防決壊で大規模浸水した長野市長沼地区の住民自治協議会は15日、被災後初の住民集会を市長沼小学校体育館で開いた。大勢が地区外に避難中にもかかわらず、協議会が目標とした300人を大きく上回る約400人が出席。協議会とは別に、「対策企画委員会」を新設して復興ビジョンをつくり、堤防強化などの住民要望をまとめて行政に働き掛けていくことを決めた。

冒頭、柳見沢宏会長(68)は「想定外の決壊が今の長沼の状況をつくり出している。今までの思いを語る中で、これからの長沼を展望したい」とあいさつ。非公開の集会では、協議会が11月に地区の全約900世帯に配ったアンケート結果(自由記述、回答87世帯)の概要をA4用紙1枚にまとめ、報告した。「再度の堤防決壊がない確実な方策がなければ長沼に住めない」「二度と決壊の起きない堤防を早急に」などと治水対策の要望も目立ったとした。

1時間半余りの集会を終え、柳見沢会長は「参加者の長沼に対する期待の大きさを感じた」。新設する対策企画委は、協議会や地区代表の計12人に加え、専門家の参加も検討するとし、国や市に「見た目に分かる」対策を求めると強調。来年2月にも初会合を開きたいとしている。

集会に参加した高校2年生矢田目詩乃さん(16)＝長野市赤沼＝は「若い自分たちがずっと住み続けられるよう、被害を今後いかに減らしていくかを考えていくことが大切だと思った」。赤沼地区の農業男性(60)は、国に千曲川の改修や堤防の強化を求め「住民の声を大きくするため、継続的に集会を開かないといけない」と話していた。

北信

支援継続へ 独自新拠点

長野「北レク」避難所閉鎖受け有志ら

支援拠点の玄関前に看板を出す菊池さん（左）と田中さん

台風19号災害で長野市が設けた避難所の一つ、同市三才の北部スポーツ・レクリエーションパークでボランティア活動をした近くの菊池奈央子さん（41）と、避難していた同市赤沼の田中恵子さん（43）らがパーク近くにアパートを借り、独自の支援拠点を23日に開設する。15日はアパートで準備を進めた。

23日 付近のアパートに開設

菊池さんと田中さんは避難所で知り合い、30余の個人・団体で11月下旬に団体「HEARTY DECO（ハーティー・デコ）」を設立。拠点では元避難者らに支援物資を提供し、交流の場にもする。21日午前11時と午後6時にパークで開くクリスマス会への参加も呼び掛ける。

市は、パークの避難所を3日に閉鎖。菊池さんは、食事の提供や支援物資の受け渡しをパークで継続してほしい、と市に申し入れたがかなわなかったという。「仮設住宅に移っても、家電や調理器具がなく、食事もままならない人がほとんど」と継続的な支援の必要性を強調する。

田中さんは閉鎖後、壁材などを外したままで暖まりにくい自宅で暮らす。住宅修繕費を考え、買い物もなるべく控えているという。そんな中、既に「自立」という言葉を行政などから聞かされるとし、「精神的に参っている。まだまだ支援が必要なことを知ってほしい」と話している。

被災者向けに衣類無償提供

長野で諏訪のNPO

諏訪市のNPO法人「絆JAPAN」は15日、台風19号の被災者を対象に衣類の無償提供会を長野市リサイクルプラザで開いた。ファッションビルなどを展開する「丸井グループ」（東京）が、洋服の下取りサービスで集まった女性用の古着約700点を法人に提供して実現。訪れた人たちが店内のように陳列された洋服を手に取って好みの服を選んだ＝写真。

コートやダウンなどの冬物を用意。自宅が床上浸水した長野市松代町城東の自営業中沢志津恵さん（44）は娘の高校1年心優さん（16）と訪れた。中沢さんは「娘の服が使えなくなってしまったので本当にありがたい」と話した。

16日は午後1～3時に開催。リサイクルプラザも15日、被災者を対象に衣類や食器などのリサイクル品を無料提供した。16日は午後1～3時に家具や自転車など約100点を提供。数に限りがあるため、希望者の中から抽選で受け取る人を決定する。

東信

漂着ごみ 皆で片付け

佐久の千曲川 100人作業

子どもたちも参加した千曲川河川敷のごみの片付け作業

台風19号で増水した佐久市の千曲川で15日、河川敷に漂着したごみの片付け作業が行われた。同市の佐久青年会議所（JC）が主催。会員のほか子どもや一般住民も加わり、計約100人がペットボトルなどのプラスチックごみや木片などを拾い歩いた。

参加者は同市中込の公園「さくラさく小径」に集合。手袋をして長靴を履き、浅蓼大橋から佐久大橋の間の河川敷を歩いた。台風の影響で流れ着いたとみられる草木が所々に山積。園芸用の支柱や発泡スチロール片などが絡み付き、参加者が手にした90リットル入りのごみ袋はすぐに満杯になった。同JCの中村雅英理事長は、ごみが目立たなくなった河原を見渡して「人の力はすごい」と感慨深げに話した。

同市野沢の自営業池田実さん（66）は犬を連れて千曲川沿いを散歩しているが、被災後は「あまりにごみが多くて見るに堪えず、切なかった」という。夫婦でごみの片付け作業を同JCに働き掛けたといい、「市民は千曲川から恩恵を受けている。いつまでも大切にしたい」と話していた。

須坂の農地 復旧後押し

長野より作業遅れ…ボランティア集結

台風19号による千曲川の氾濫で被害に遭った須坂市村山地区などの果樹園で15日、県内外のボランティアが漂着したごみの片付けを進めた。対岸の長野市側に比べて果樹園の復旧作業が遅れているとの農家らの声を受け、須坂市などの呼び掛けに計約600人が集まった。

千曲川氾濫

相之島、村山、福島の3地区に分かれ、河川敷内の果樹園でプラスチックや木の枝などのごみを回収。流木などの固まりが引っ掛かったリンゴの木もあり、手作業で取り除いた。

長野市で幾度か泥かきなどの作業に参加したという同市豊野町の男性会社員(59)は「河川敷内の作業は初めてだが、予想以上に被害がひどい」。岡山市社会福祉協議会の職員と共に参加した山本聡之さん(65)＝岡山市＝は「雪が降る前に少しでも農地をきれいにする手伝いがしたかった。ただ、重機でないと取り除けないごみもあった」と話していた。

須坂市はこれまで優先してきた住宅支援が一段落したとし、農業被害への対応を本格化。今後、国の補助事業を活用して泥や流木など大きなごみの撤去を進めるという。

果樹園でごみを拾うボランティアたち＝15日午前10時20分、須坂市村山

トレーラーハウスで交流を

長野市 長沼地区に2台設置

台風19号で被災した長野市長沼地区の住民の交流拠点として、市が15日、トレーラーハウス2台を同市穂保に設けた。隣接する市長沼支所や併設の公民館がまだ使えないためで、地区外で避難生活を送るなど、散り散りになっている住民のよりどころにしてほしいと期待している。

1台約30平方㍍でエアコンやテレビ、トイレ付き。支援情報などの掲示板もある。利用は原則、平日午前9時～午後5時だが、市は「土日や夜間も開設できるよう柔軟に対応する」としている。

この日は、16日からの利用開始を前に長沼地区住民自治協議会会長の柳見沢宏さん(68)ら地元区長らと加藤久雄市長がハウスを見学。柳見沢さんは「集まりたくても場所がなかっただけにありがたい」とし、定期的に交流会を開いていきたいと語った。

住民交流拠点のトレーラーハウスを見学する長沼地区の区長ら。右奥は決壊地点の仮堤防＝15日、長野市穂保